

乳児の非言語的な感情の表出に対する保育者の関わり

Childcarer's involvement in expressing nonverbal emotions in infants

星野 優芽

Yume Hoshino

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード：乳児保育，保育者，視線

Key words：Infant child care, Child carer, Look

1. 研究目的

保育の現場において、子どもの感情を理解し関わることはとても重要である。この「理解」は、子どもの言動や行動、表情に基づく。特に言葉を自在に扱うことの出来ない乳児においては、表情からその思い等を理解することが重要になると考えられる。こうした「理解」の基点となるものとして「視線」に着目したい。というのも、これまで乳児保育における「視線」の研究には、乳児の「社会的参照」に関するものが多くある。例えば、乳児が保育者に「視線」を送ることの意味について、松中・開（2009）は、「社会的参照」による「乳児の情動・感情的情報の利用」という視点から、次のように述べている。

社会的参照において、乳児が成人と同様のメカニズムで与えられた情動・感情的情報を利用していると仮定すると、1) ある事象へと注意を向け、2) 情報を求めて他者を参照し、3) 他者の表出している表情・声色の背後にある情動・感情を読み解き、4) それをターゲットと結びつけ、5) そこから適切な行動を導き出す、といった過程が考えられる。^{注1)}

これは、「社会的参照」という行動が、他者の表出している「表情」や「声色」によって、「自己の行動を調整すること」^{注2)} という意味を持つことを示している。このことは乳児保育という観点から考えれば、保育者が乳児から向けられた視線に対して、「表情」や「声色」で応えることが、子どもの「自己の行動を調整すること」に大きく結び

ついているという可能性を示すことにつながると考えられる。しかしながら、乳児保育における「視線」の研究については、乳児の「視線」を研究するものは多くあるが、保育者の「視線」に着目し、それが保育の中でどのような意味をもつのかについて述べられた研究は現在のところ見つけることが出来ていない。

そこで本研究では、乳児から向けられた「視線」に対して保育者はどのように関わっているのか、また、保育者が目を合わせて関わる時、保育者の「視線」はどのような意味を持っているかを明らかにすることを目的としたい。

2. 研究実施内容

今回は、本研究の目的を明らかにする前に、二つのことに取り組んだ。一つは、これまでの先行研究のなかで、保育及び乳児と養育者における視線がどのように語られているか、自身の研究はそうした先行研究の中にどのように位置づけるかを明確にし、それによって、改めて研究の目的を設定し直すことである。もう一つは収集したデータの分析方法を検討することである。

2. (1) 先行研究の整理

先行研究の整理については、「視線」そのものに関する研究と、乳児と保育者の「視線」に関する研究を中心に検討した。

遠藤（2008）は、コミュニケーションにおける視線と表情が何を発しているのかについて検討し、そのなかで「視線」を「読む目」と「読まれる目」として捉えた。遠藤は、「当然のことながら、目という感覚器官を有するすべての生物種は、多くの

場合、自らの生存や繁殖において重要なものに視線を向ける」^{注3}とし、これは、目を持つすべての生物種が、自身の意図や関心、注意は視線に現れるということを示している。遠藤はこの視線を「読む」主体ではなく、「放つ」主体であると捉え、その放たれた視線は、「自らの視線、さらには自分自身の関心の所在や心の状態をいとも簡単に他の個体から読み取られてしまいかねないということの意味する」^{注4}と述べている。これを乳児保育の観点から捉えれば、乳児の視線は、関心の所在や心の状態を保育者によって「読まれる目」ということになり、このときの保育者の視線は乳児の関心の所在や心の状態を「読む目」として働くといえるだろう。これらのことから、乳児保育において視線は、子どもの関心や心の状態を理解するために重要なツールとなることがわかる。

乳児と保育者の「視線」に関する研究においては、乳児の発達の視点から述べられる研究が多くある。特に「社会的参照」について多く取り上げられており、「社会的参照」のメカニズムに関する研究（松中・開，2009）^{注5}や、「社会的参照」それ自体を「心の理論」の先駆体として捉えられることを示唆する研究（遠藤・小沢，2001）^{注6}があった。そうした発達に関する研究の中に、わずかなではあるものの、養育者側の視点を加えた研究がある。

小沢・遠藤（2001）^{注7}は、これまでの「社会的参照」研究を概観し、「自律型の社会的参照」、「巻き込まれ型の社会的参照」、「相補型の社会的参照」という三つに分けて「社会的参照」を捉えなおしている。ここでは、小沢の述べる「相補型の社会的参照」に着目したい。

「相補型の社会的参照」の定義は、「乳児に潜在する漠とした情報探索欲求を養育者が読み取って、やはり相対的に未熟な乳児の行動調整能力を配慮しながら働きかけ、互いが補い合う形で初めて成立する乳児の行動調整のこと」^{注8}としている。この「乳児に潜在する漠とした情報探索欲求を養育者が読み取って」というのは、言い換えれば養育者がある程度、子どもの何かしたい、やってみたい、という意図を受け取り、それを理解したうえで関わることによって、互いに補い合うことができるということではないだろうか。つまり、そういった場面での保育者の視線は、子どもの意図を読み取るためのツールになっているといえるだろう。このツールは、先に述べた遠藤（2008）の示

す「読む目」として働き、ここでの乳児の視線は「読まれる目」として文字通り意図を読まれることになる。

では、保育者が子どもの意図を読み取り、そのうえで働きかけることによって、子どもにはどのような作用がみられるのだろうか。本研究では、保育者が自らの視線によって、どのように子どもの意図や関心を理解し、働きかけているかを検討することによって、子ども理解における「視線」が重要な意味を持っていることを明らかにしていきたい。

2. (2) 研究方法の検討

研究方法を検討するにあたっては、本研究のためのデータは未だ収集することができていないため、筆者が卒業研究時に収集したデータを用いて検討した。

対象

保育園の0歳児クラスの子ども及びその担任保育者1名

記録の方法

記録については、保育者の視線、保育者と乳児の音声、保育者の表情を記録することにする。保育者の視線については、ウェアラブル型アイトラッカー（Tobii Pro グラス2）を用いて記録したいと考えている。なお、卒業研究時は眼鏡型カメラを用いて保育者の視野を記録したため、分析方法の検討においてはそのデータを使用する。保育者と乳児の音声については保育者にICレコーダーを首からかけてもらい、記録する。保育者の表情については、筆者がハンディタイプのビデオカメラを持ち、保育者の正面から表情がわかるように記録する。

収集したデータの分析方法

データの分析については、新たに設定した目的を明らかにすべく、子どもと保育者のやりとりから、両者にどのような意図があるのか、保育者が子どもから読み取った意図に対してどのようにかわっているのかに注目し、分析することとする。

卒業研究時に収集した映像と音声のデータは、会話分析で用いられる、登場人物の語る言葉やその際の目線の先を示すトランスクリプト（好井・山田・西阪，1999）^{注9}として文字に起こしてあるため、まずはそれを基に乳児と保育者の視線が合うやりとりを抜き出し、表を作成した。その際の

項目としては、①トランスクリプトの発話番号、②どちらが先に目を向けたか、③どちらが先に目をそらしたか、④子どもの精神状態（表情）、⑤保育者の精神状態（表情）、⑥目が合っている時間、⑦第三者の有無、⑧遊びの継続性とした。さらにそこから、目が合うやりとりが続くものを抜き出し、エピソードごとの表をつくる。その際の項目は、①エピソード番号とエピソードの名称、②トランスクリプトの発話番号、③どちらが先に目を向けたか、④どちらが先に目をそらしたか、⑤子どもの精神状態（表情）の変化、⑥保育者の精神状態（表情）の変化、⑦遊びか養護か、⑧対象となるもの、⑨やりとりが終わるときの様子（子ども）、⑩やりとりが終わるときの様子（保育者）とした。

次にこの二つの表から、乳児と保育者の視線のやりとりを分析する。現段階では、図1.のように、保育者と子どもの視線のやりとりの軌跡とそれに付随する働きかけを構造ごとに整理している。

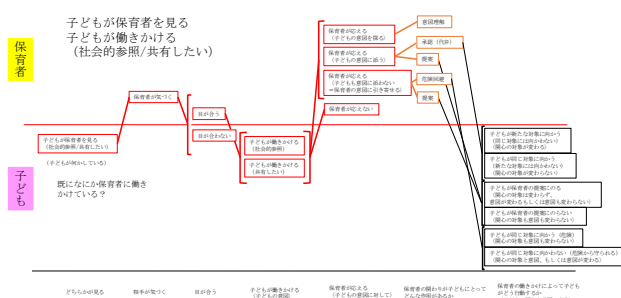


図1. 保育者と子どものやりとりの構造

このように保育者と子どもの視線と働きかけのやりとりを整理することによって、子どもの視線の方向から意図や関心を判断し、また、それを保育者はどのように見ているのか、そして保育者の

働きかけが子どもにとってどのように作用しているのかを分析することで、保育者の視線と働きかけがどのように関係しているのか明らかにしていきたいと考えている。

3. 今後の研究の進め方

新たに設定した目的を明らかにするために、まずはデータの収集を終え、データ起こし、分析を行い、研究を進めていきたい。

4. 引用・参考文献

注1) 松中玲子・開一夫, 「乳児における情動・感情的情報の利用, およびその発達過程」, 『心理学評論』, 2009, Vol.52, No.1, p.91

注2) 同上, p.88

注3) 遠藤利彦, 「感応する心ー視線と表情が発するものー」, 『信学技報』, 2008, HCS108 (187), p.14

注4) 同上

注5) 松中玲子・開一夫, 「乳児における情動・感情的情報の利用, およびその発達過程」, 『心理学評論』, 2009, Vol.52, No.1, p.88-p.98

注6) 遠藤利彦・小沢哲史, 「乳幼児期における社会的参照の発達の意味およびその発達プロセスに関する理論的検討」, 『心理学研究』, 第71巻, 第6号, p.498-p.514

注7) 小沢哲史・遠藤利彦, 「養育者の観点から社会的参照を再考する」, 『心理学評論』, 2001, Vol.44, No.3, p.271-288

注8) 同上, p.280

注9) 好井裕明・山田富秋・西阪仰 編, 『会話分析への招待』, 1999, 世界思想社